



日本イスタニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第30号 (2023年10月1日) / Núm. 30 (1 de octubre de 2023)

日本イスタニヤ学会事務局

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2-39-2-401

(株)ガリレオ 学会業務情報化センター内

Tel: 03-5981-9824 Fax: 03-5981-9852

e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp

(<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>)

広報委員会「会報」編集部

〒187-0025 小平市津田町 2-1-1

津田塾大学学芸学部国際関係学科

中井博康 宛

Tel: 042-342-5155

e-mail: nakai@tsuda.ac.jp

目 次

【巻 頭 言】

杉山 晃 バルガス=リヨサと『都会と犬ども』…………… 2

【エッセイ】

1. Arturo ESCANDÓN

El uso de ChatGPT en la educación superior…………… 3

2. 柿原 武史 生成 AI 技術はスペイン語教育にいかなる

影響をもたらしうるのか…………… 5

3. 塚原 信行 カタルーニヤ自治州の教育における言語をめぐる問題…………… 7

4. 田坂 建太 The Tyetsの“Coti x coti”と

芸術活動の場におけるカタルーニヤ語…………… 9

5. Daniel ARRIETA DOMÍNGUEZ

Implementación de un programa de lectura extensiva en español:

Desafíos y posibilidades…………… 11

6. 竹村 文彦 国書刊行会創業50周年に寄せて…………… 14

【著書紹介】

1. 浅香 幸枝 浅香幸枝(編)『2030 アジェンダ (SDGs) 実現に向けて
—世界の先駆的実例から学ぶ—』(三修社、2023)…………… 15

【学会等報告】

1. 三浦 知佐子 京都セルバンテス懇話会主催第 23 回全国・奈良大会
(2022 年 9 月 17 日 於奈良県コンベンションセンター) …… 17

2. 土屋 亮 「関西スペイン語学研究会」とその(直近の)活動について…………… 18

【新刊案内】 (2022 年 6 月～2023 年 5 月)…………… 20

【HISPÁNICA 編集委員会より】…………… 24

【編集後記】…………… 24

【巻頭言】

バルガス=リョサと『都会と犬ども』

杉山 晃

私は子ども時代をペルーで過ごしたこともあって、大学に入ってからラテンアメリカの文学作品を読むようになった。とりわけペルーの作家たちに興味を持ち、なかでもアルゲダスとバルガス=リョサを最頁にして読んできた。アルゲダスはアンデスの先住民を描き、バルガス=リョサは海岸部の白人社会を描いたので、ある意味で両者の作品には異なったペルーの側面があり、それぞれの語り口で紡がれる物語を読むことで、ようやく我が胸の内にあるペルーを全体的に甦らせ、それとともにしだいに遠ざかっていく故郷をひそかに懐かしむことができたのではないかと思う。

とはいえ、私が大学に入学した年にアルゲダスはピストルで自死してしまい、結局リアルタイムで現在に至るまで新作を読み続けられているのはバルガス=リョサだけである。その著作で最初に読んだのは、図書館のカード目録を繰っているときにたまたま出くわし、小説だと思わずに、ただリマの街並みに再会できると思って借りた *La ciudad y los perros* (1963) である。

ラテンアメリカ文学の世界的な隆盛期の先がけとなったこの作品はむろんのこと、バルガス=リョサの名声を確固たるものにした次作の *La casa verde* (1966)、あるいはガルシア=マルケスの *Cien años de soledad* (1967) にしても、当時の日本ではまだほとんど知られておらず、海の向こうの反響がヨーロッパやアメリカ経由で、こちら側に届くようになるにはまだそれなりの年月を要した。雑誌『文藝』がラテンアメリカ文学特集を組むのは 1971 年、『百年の孤独』の邦訳が刊行されるのは 1972 年であった。

こうした数年にわたる時差ともいべき隔たりは、瞬時のうちに情報が伝わるようになった現在からすると、いささか信じがたいものがある。もっとも私が最近のバルガス=リョサの日々の動向（パトリシア前夫人とよりを戻したことや、アカデミー・フランセーズの会員に選出されたこと、リマで勲章をもらい、孫の結婚式でアンデス風の踊りを賑やかに踊ってみせたことなど）を写真や動画でつぶさに知っているのもいささか奇妙な気がしないでもない。ちなみにこの文章を書いているいま現在は、スペインのコスタ・デル・ソルにある絶食クリニック、「ブヒンガー・ウィルヘルミ」に 3 週間の予定で滞在中である。すでに 30 数年前から通い続けている毎年の恒例行事であり、その効能については、かつて「パンなしの水」という題でスペインの『エル・パイス』紙に寄稿したことがある。それはともかく、86 歳のバルガス=リョサにはこのままずっと元気に旺盛な活動を続けてもらいたい。

旅の最中だろうと、クリニックで静養中だろうと、毎日決まった時間に机に向かうバルガス=リョサだが、1950 年代の混乱したグアテマラの政情を描いた *Tiempos recios* を上梓してから 4 年になる。そろそろ次の作品ができあがってくる頃かなと思っていたら、案の定、ペルーを舞台に、ある音楽家の夢と挫折を描いた最新作 *Le dedico mi silencio* が近日常(10月)に刊行されるというニュースが、ボテロの丸々としたユーモラスな人物たちの装丁と共にインターネット上で飛び交っている。

ところでバルガス=リョサが初めて来日したのは 1979 年で、国際交流基金や故増田義郎先生の尽力で、ペルーの Pontificia Universidad Católica del Perú やメキシコの El Colegio

de México との交流が盛んになり始めていたころである。1970年代には大江健三郎や見田宗介、鶴見俊輔、山口昌男といった著名な文化人や知識人がラテンアメリカをすでに訪れ、こんどはバルガス=リヨサやボルヘス、オクタビオ・パスといった大物たちがつぎつぎに招聘される番となった。そうした折には増田先生の教え子であるわれわれは、アテンドに駆り出され、私もバルガス=リヨサと大江健三郎の対談の通訳（『海』1979年5月号に掲載）、さらに山口昌男との対談も担当したものの（『世界』1979年7月号に掲載）、不勉強がたたって「異化」や「トリックスター」「表現主義」など専門的な文学用語のスペイン語訳が分からず、増田先生の前でだいぶ冷や汗をかいたのをおぼえている。いま手元にこれらの雑誌がないので対談の内容は思い起こせないが、ただ増田先生は対談が終わってから「きょうの山口さんはいまひとつ冴えなかったな」とつぶやかれたことと、大江健三郎の友人でもあった「海」の編集長のビールの誘いを断って「痛風がひどくなってるからこのまま帰るよ」と足を引きずりながら四ツ谷駅に向かって帰って行かれた光景だけがときおり脳裏に蘇ったりする。

バルガス=リヨサに再会したのはそれから10年後ぐらいのペルー大使館のレセプションだった。持参した『都会と犬ども』にサインしてもらい、「いい訳だと聞いているよ」とねぎらってくれたが、単なるお世辞だろうと聞き流し、あいさつもそこそこに会場の奥に退散した。見ればそのソファに岡本太郎が陣取っており、しばしなんだかよくわからない話に聞き入ることになった。

しかしながら、このあいだエル・パイス紙が制作した「バルガス=リヨサの書棚 En la biblioteca de Mario Vargas Llosa」という10分ほどの動画を見ていたら、バルガス=リヨサがいつになく快活でリズムカルな声で、自分に強い影響を与えたフローベールの『ボヴァリー夫人』やユーゴーの『レ・ミゼラブル』、フォークナーの『八月の光』についてひとしきり話した後、女性レポーターと天井まで届く書棚を見て回るのだが、動画のほとんど終わりの方でふと棚から2冊の本を取り出し（それが『都会と犬ども』の旧版と新版だったのだが）、レポーターにそれらの表紙を見せながら何やら説明するのである。声は聞こえないが、「日本にいる同胞が頑張ってくれてくれたんだ。なかなかのできばえらしい」と言っているのではないかと私は夢想するのである。

（すぎやま・あきら 清泉女子大学理事長）

【エッセイ1】

El uso de ChatGPT en la educación superior

Arturo ESCANDÓN

Podríamos decir que la inteligencia artificial (IA) es precisamente eso: una imitación técnica de la inteligencia humana. Sus cimientos son los algoritmos: una serie programada de pasos lógicos que se siguen para resolver un problema. La novedad de ChatGPT es que es un programa capaz de interpretar el lenguaje humano con el fin de activar los algoritmos escritos en lenguaje de máquinas y traducir los resultados de vuelta al lenguaje humano, con lo cual aparenta ser un profesor sabelotodo. A este tipo de programas que pueden conversar con el usuario se lo

denomina módulo de lenguaje.

En la educación superior, ChatGPT se puede usar de múltiples maneras, según la UNESCO (UNESCO-IESALC, 2023). Aparte de las más obvias, como traducir una palabra, locución o texto, he aquí tres adaptadas a las necesidades de los docentes y estudiantes de español:

- 1) *Motor de posibilidades.*— Puede parafrasear de manera sencilla un segmento de texto sintáctica o semánticamente complejo o explicarlo paso a paso.
- 2) *Co-diseñador.*— Los docentes pueden pedirle que cree un texto acerca de un tema según los niveles de referencia del MCER y que genere preguntas de comprensión lectora de respuesta abierta o múltiple; problemas gramaticales, acertijos, etc. O tareas más amplias: rúbricas de evaluación, un programa de estudios, etc.
- 3) *Compañero de estudios.*— Se le puede pedir que evalúe si el enunciado *Yo compraba frutas ayer* es correcto o no y por qué, o que defina qué es la telicidad y dé numerosos ejemplos.

Las versiones más recientes de ChatGPT pueden, además, generar un ensayo o artículo completo. Basta con que el usuario se lo pida y le indique el número de palabras deseado, disciplina (filosofía, sociología, etc.) y sistema de referencias (APA, MLA, Chicago, etc.). Por esta razón, es probable que los docentes deban evitar la evaluación de los estudiantes mediante el uso de informes. En este sentido, la evaluación oral, el *viva voce* del Medioevo, y las pruebas escritas de la educación moderna podrían salir de su empolvado ataúd.

Por último, ChatGPT es también una máquina especialista en chapucerías conceptuales. En una clase reciente de lectura mis estudiantes estaban leyendo un artículo periodístico (escrito por seres humanos) que giraba en torno a la diferencia entre el acoso y el escrache. Este, por muy desagradable que pueda resultar, es un tipo de manifestación política, pero el acoso es un delito penal tipificado en el artículo 172 del Código Penal español, y se caracteriza por la vigilancia o persecución de la víctima, el intento de contacto, el uso de información privada, la limitación de la libertad, el daño al patrimonio, etc.

Consultado acerca de la diferencia entre estos dos términos, ChatGPT respondió que los dos eran formas de hostigamiento. El primero es una forma de protesta pública en la que un grupo de personas señala y denuncia a un individuo u organización por su comportamiento, mientras que el segundo se refiere a una conducta persistente y no deseada de una persona hacia otra, con el objetivo de intimidarla, humillarla o controlarla. Excelente respuesta, salvo por el hecho de que en ningún momento menciona que una persona que comete acoso puede ser castigada con pena de cárcel o el pago de una multa, pero otra que realiza un escrache no. En otras palabras, si bien la respuesta de nuestro marisabidillo módulo es correcta, no apunta al corazón conceptual de la cuestión. Si mis estudiantes confiaran en sus explicaciones, jamás entenderían la diferencia

jurídica entre una y otra forma de hostigamiento. Y si Vd. lo usara en la creación de material didáctico tendría que guiarlo de manera estricta para que el resultado no fuera un pegoteo de ideas carentes de unidad o precisión conceptual.

En conclusión, sin la supervisión de un docente, el estudiante que confíe ciegamente en la inteligencia artificial puede reprobado el careo socrático. ¿Por qué? Simplemente porque los conceptos complejos se desarrollan a partir de problemas concretos (un problema jurídico, por ejemplo) y no a partir, exclusivamente, de generalizaciones tales como *forma de hostigamiento*. El investigador o docente debe proveer los parámetros de actuación de ChatGPT. Mi recomendación: úselo de manera inteligente.

Referencia bibliográfica

UNESCO-IESALC. (2023). *ChatGPT e inteligencia artificial en la educación superior: Guía de iniciorápido*[PDF].https://www.iesalc.unesco.org/wp-content/uploads/2023/04/ChatGPT-e-Inteligencia-Artificial-en-la-educacio%CC%81n-superior-Gui%CC%81a-de-inicio-ra%CC%81pido_FINAL_ESP.pdf

(アルトゥーロ・エスカンドン 南山大学教授)

【エッセイ 2】

生成 AI 技術はスペイン語教育にいかなる影響をもたらさうのか

柿原 武史

このところ生成 AI 技術への関心が高まっている。生成 AI なる語が知られるようになったのは、OpenAI 社が 2022 年 11 月に ChatGPT というサービスを公開したことがきっかけであり、多くの人が話題にし始めたのは 2023 年に入ってからだ。つまり、ごく短期間のうちに、まるでこの技術が世界を一変させたかのように騒いでいるのである。これほどまでのインパクトを持ったのは、この技術が、従来の AI 技術とは異なり、自然言語で指示を出せば、新たなコンテンツを生成し、人間が書くような文章で回答してくれるからだろう。本稿では生成 AI 技術がスペイン語教育にもたらさうる影響について考えてみたい。

生成 AI 技術は巨大なデータに基づいて事前に学習をしているため、幅広い話題について自然な言語で対応できる。そのため最新の話題には弱い、日本語文をスペイン語に訳したり、スペイン語で何かのテーマについて作文したりすることなどは高い精度でこなせる。そうすると、外国語教育は非常にやりにくい仕事になってしまう。学習者の中には出された課題を生成 AI に丸投げし、得られた回答を書いて提出するような者も出てくるから。第 2 外国語のスペイン語学習者には、「簡単な会話」ができることを学習目標としている者が多い。しかし、それであれば、すでにポケット通訳機や翻訳アプリで十分用を足すことができる。そうすると第 2 外国語レベルの外国語教育など不要だという極論も出てこよう。以下では、①学習者による生成 AI 技術の使用について、②生成 AI 技術の出現に応じた言語教育の内容について、③外国語教育の存在意義について、問題点を整理し

つつ私見を示したい。

まずは、学習者が生成 AI 技術を用いることについてだが、これは電子辞書が出現した時のことを考えてみると参考になる。紙の辞書なら前後の語句も見渡せ、幅広い知識を身に付けられる、といった今でも頷けるような主張から、紙の辞書でなければ勉強にならない、大学生なら辞書ぐらい引いて当然だといった感情的なものまで、電子辞書に対して様々な否定的意見があった。しかし、中辞典を小さな機器に入れて持ち運べる利便性や学習者も高校時代までの英語学習で使い慣れていることから、電子辞書は瞬く間に普及した。今やスマホには大辞典までもが入るのである。辞書へのアクセスが格段に向上した点は大いに評価すべきだろう。

とはいえ、機械翻訳や生成 AI 技術は次元が異なるという意見もあろう。文法を理解したうえで、語句の意味を調べ、それらを頭の中で組み立てて文を解釈し、作文をすることこそが語学学習であり、その根幹を機械任せにすると意味がないという主張は理解できる。しかし、それらの技術は入手可能なものであり、教室内で使用を禁じても、学習者は教室外ではそれらを使うだろう。電卓を使わず暗算しろと言っても誰も聞かないのと同様だ。便利な機器をどう使いこなすかを考えることこそが我々がすべき仕事なのではないだろうか。

そこで重要なのは外国語学習の目的を再考することだ。既に見たように第 2 外国語学習者の多くが「簡単な会話」ができることを目標としている。これは大学生の知的な好奇心という点では物足りないが、コミュニケーションを取りたいという動機は重要だ。異言語話者との意思疎通が外国語を学ぶ目的なら、こうしたツールを使ってでも自らが言いたいことを外国語にし、それが意図した内容に翻訳されているのか検討し、おかしければその理由を考えるような活動も立派な外国語教育だろう。外国語の文書をこれらのツールを使って読んでみて、原文と機械翻訳、さらには人が訳したものを比較する中で文法を学ぶというのもいいだろう。もちろん、このようなやり方では、体系だった文法学習は不可能だ。すべての文法項目を網羅することはもとより、冠詞の使い方など細かい点をしっかりと理解することは不可能である。そこをどう考えるか、教える側も学ぶ側も発想の転換が必要である。とはいえ従来の方式で、どれだけの学習者がそれらをきちんと理解し、消化できているのだろうか。テストのために多くの活用を丸暗記し、履修後に学習目標であった簡単なコミュニケーションを取れるようになっている学習者がどれだけいるのだろうか。従来の外国語教育の根幹が揺さぶられている今こそ、我々は、新技術と共存できる外国語教育の方法を考え出すべきだろう。

次に、生成 AI の出現に応じて言語教育の中身をどうするかという点について考えたい。機械翻訳の性能が劇的に向上した数年前から、「外国語でなく母語をしっかりと教育すべきだ」という意見を外国語教育関係者から耳にすることが多くなった。つまり、(母語である)日本語がきちんと書けないと機械翻訳に正確なスペイン語に訳してもらえないという意見である。確かにスマホの普及に伴い、長い文の読み書きが苦手な学生が増えた。しかし、スペイン語の授業が日本語の授業になってしまうと、スペイン語教育は必要ないと自己否定するようなものだ。もちろん、そうした主張をする人はそんなことは意図していないだろう。だが、この意見にはもう一つ問題がある。それは、機械翻訳に正確に訳してもらえるようなことばを書くべきだという発想である。このような態度は、AI 崇拝の規範主義につながりかねない。これでは学習者は機械翻訳のみが正しいと考え、授業の内容や

教員の存在を軽視してしまうことになりかねない。そもそも言語は人間の物である。その点を忘れてはいけない。

最後に外国語教育の存在意義についてだが、これはもうここまでの議論で結論が出ている。異言語間で人がコミュニケーションを取り、互いに理解し合うことが外国語を学ぶ究極の目的であれば、いかなるツールが出現しようが、人が他者の言語に興味を持ち、理解し合おうすることが重要だ。そうした態度を養い、自己の言語を相対化し、他者の言語の特徴を発見し、面白いと思える知的好奇心を育むために、外国語教育は絶対に必要なのである。

(かきはら・たけし 関西学院大学教授)

【エッセイ 3】

カタルーニャ自治州の教育における言語をめぐる問題

塚原 信行

カタルーニャ自治州では、1980年代以降、全住民のバイリンガル化（カスティーリャ語とカタルーニャ語）を通じてカタルーニャ語の維持を目指す言語政策が展開された。言語政策は社会のあらゆる領域を対象として行われているが、特に効果が高いのは公的義務教育におけるカタルーニャ語イマージョンプログラムである。「カタルーニャ語を学ぶ」のではなく「カタルーニャ語で学ぶ」というイマージョンプログラムにより、マジョリティ言語であるカスティーリャ語話者の多くを、マイノリティ化言語（llengua minoritzada）であるカタルーニャ語とのバイリンガル話者に転換しつつ、言語による社会の分断を未然に防止してきた。近年では次の表1に示すような状況にある。

	カタルーニャ語	カスティーリャ語
理解する	94.4%	99.8%
話せる	81.2%	99.5%
読める	85.5%	98.5%
書ける	65.3%	97.6%

表1:カタルーニャ自治州における15歳以上の技能別言語能力の状況(2018年)[出所:カタルーニャ統計院データを一部加工 <https://www.idescat.cat/indicadors/?id=anuals&n=10367>]

しかし、公的義務教育におけるカタルーニャ語イマージョンプログラムに対しては、その定着と比例するように批判が強まってきた。典型的な批判は、イマージョンプログラムによるバイリンガリズムの進展を、カタルーニャナショナリズムの現れとみなし、行き過

ぎと捉えるものである¹。また、プログラムをめぐっては、児童生徒がカスティーリャ語で教育を受ける権利(あるいは保護者が児童生徒にカスティーリャ語で教育を受けさせる権利)を争点とする非常に多くの行政訴訟が提起されてきた。言語政策に与える影響が大きいと考えられる最近の例としては、カタルーニャ高等裁判所による2020年12月16日付け判決がある(STSJ CAT 6095/2020)。この訴訟は国とカタルーニャ自治州の間で争われたもので、判決の主要部分は、カタルーニャの教育システムにおいて児童生徒がカスティーリャ語およびカタルーニャ語を通常の教授言語とした教育を受けるに際し、いずれかの言語の使用割合が25%を下回らないような措置を講ずることを自治政府に義務づける、というものである。これまで基本的にはカタルーニャ語を教授言語として教育が行われてきた状況に照らし合わせると、実質的には教授言語としてのカスティーリャ語の使用割合を最低でも25%とすることを求める判決である。

この判決から1年半ほどが経過した2022年6月9日、自治政府は「大学以外の教育における公用語の使用と学習に関する法 (*La Llei 8/22, sobre l'ús i l'aprenentatge de les llengües oficials en l'ensenyament no universitari*)」という州法を公布した。この州法は、長い前文と2つの条文、2つの附則から構成されており、前文では、自治州における過去の関連諸法令(1979年自治憲章、1983年言語正常化法、1998年言語政策法、2006年改正自治憲章)や2009年スペイン教育法、憲法裁判所判例に言及し、21世紀に入ってから社会的変化にも触れつつ、法の位置づけを明らかにしている。続く第1条では制定目的を述べ、第2条で公用語の使用と学習について定めている。とりわけ注意を引くのは以下に訳出する第2条1項である。

カタルーニャの固有言語であるカタルーニャ語は、教育システムにおいて、教授、学習およびニューカマーの児童生徒の受け入れに通常用いられる言語である。カスティーリャ語は、各教育機関が定める言語プロジェクトが定める内容、および、2項、3項、4項が定める基準に従って用いられる。

第2条1項は、カタルーニャ自治州の教育システムにおけるカタルーニャ語とカスティーリャ語の役割の違いをあらためて明確に定めており、この違いに基づいて、両言語の具体的な扱いの細部を構築していくものと予想される。この手法自体は、すでに過去の言語政策法制において採用されたものであり、その機能は「実質化」であった²。今回の場合においても、自治政府は、25%という数量割当を用いずとも、カタルーニャ自治州の義務教育における言語的目標³を**実質的に**達成できる(できている)というロジックをもって、

¹ 塚原信行 (2012) 「言語政策から言語権政策へーカタルーニャの言語政策を事例としてー」 ましこ・ひでのり (編) 『ことば/権力/差別 [新装版]』 235-255, 三元社

² 塚原信行 (2004) 「スペイン・カタルーニャ自治州の言語法に関する一考察」 *Hispanica* (48) 65-80

³ 「義務教育終了時に、カタルーニャ語とカスティーリャ語という2つの公用語を生徒が完全に習得していること」であり、1998年言語政策法第21条3項、カタルーニャ教育法第10条1項などで言及されている。

現在の言語編成 (règim lingüístic) を継続する意向と考えられる。

カタルーニャ自治州における言語政策は、カタルーニャ語使用に対するアファーマティブ・アクションとしての側面を持っており、個人の権利との抵触が行政訴訟という形で表面化してきた。これは、突き詰めれば、どのような言語編成を追い求めるべきかについての社会的合意の程度を示しているとも言え、今後も教育現場の現実、政治・社会運動、各種法令や訴訟などを通じて揺れ動くテーマであろうが、「揺れ動く」ということ自体は極めて健全であると同時に、言語編成について考える機会が少ない (= 考えなくて済む) われわれにとっては示唆に富む興味深いものであり続けられると思われる。

(つかはら・のぶゆき 京都大学国際高等教育院教授)

【エッセイ 4】

The Tyets の“Coti x coti”と芸術活動の場におけるカタルーニャ語

田坂 建太

2023 年前半のカタルーニャ語音楽シーンは、Xavier Coca と Oriol de Ramón (いずれも Mataró 出身、1998 年生) のデュオ、The Tyets の楽曲によって大いに賑わった。2 月に“Coti x coti”が YouTube 上で公開¹され、この曲を含むアルバム *Èpic solete* が 3 月に発売・ストリーミング開始されると、高い人気を得た。

ところで「カタルーニャ語音楽シーン」とは「カタルーニャの音楽シーン」と同義ではない。カタルーニャ語母語話者の大半はカスティーリャ語とのバイリンガルであり、その音楽も不自由なく楽しむことができる。当然、楽曲を作る者の視点に立てば、話者数では圧倒的なカスティーリャ語で歌う方が多くの潜在的なファンを獲得できる。だが、The Tyets をはじめ、こうした状況でもカタルーニャ語での制作にこだわりを持つアーティストは多く、カタルーニャ語による文化・芸術活動の大きな推進力となっている。

一方で、そうした活動が無批判に歓迎されてきたわけではない。現代のポップ音楽の中では、barbarisme (不純な・非規範的な借用語) が散見されることも珍しくないためだ。2019 年にカタルーニャ語音楽としては大ヒットを記録した Rosalía の“Milionària”では、「誕生日」を *cumpleanys* (*cumpleaños* の借用、規範的には *aniversari* とする) と歌ったことに批判が相次いだ²。The Tyets のアルバム *Èpic Solete* も、曲中の *bailoteo*、*tonteria* といったカスティーリャ語由来の借用語法について批判を受けているし、“Coti x coti”というタイトルもまた、カスティーリャ語 *cotilleo* の借用に由来する³ものだ。

現代カタルーニャ語の語彙的規範について考える上で、そうした規範が形成された過程を無視することはできない。中でも、20 世紀前半に活躍した、*Diccionari general* (1932)

¹ 2023 年 8 月現在も視聴可能。 www.youtube.com/watch?v=Kx73OzRj7qE

² Planas, Valentina (2023, 25 my.). “Un ‘bailoteo’ per salvar el català.” *El Nacional*: www.elnacional.cat/ca/cultura 後述する The Tyets の楽曲についての言及もある。

³ Camps, Magí (2023, 22 my.). “Cotis a ritme de sardanes.” *La Vanguardia*: www.lavanguardia.com/encatala

の著者 Pompeu Fabra が果たした役割は大きい。田澤 (1992) は、「スペイン語からの借用語や借用語法に溢れていたカタルーニャ語を純化し、その近代化をはかった」功績から、「ファブラなくしては現代のカタルーニャ語文学はない」と評している。また、Eugeni d'Ors や Josep Carner ら同時代の作家・詩人は、古典主義・規範主義色の強い文体を駆使した作品を著し、ノウサンティズマ noucentisme と呼ばれる文化運動を牽引した。この時期に、現代カタルーニャ語の語彙的・文法的規範の基礎が形成された。

だが、フランコ体制の成立によって、そうした近代化の動きは大きく阻害された。公的な場からカタルーニャ語は排除され、マス・メディアでの使用も制限されたため、相対的に芸術活動の場で使用される言語の重要性が高まった。独裁期には、内戦前の文飾的文体をさらに推し進める作家と、時代の変化に合わせて現実の話し言葉に近い文体を用いる作家が現れた。Pericay と Toutain (1997) は、このうち Joan Sales や Mercè Rodoreda といった作家による後者の試みを「[19]25年の散文体 *prosa del 25*」と定義し、高く評価する。だが、実際には Manuel de Pedrolo や Jordi Arbonès の作品や翻訳の影響を受けた前者の文体が支配的となっていた。当時は校正者の多くも、カスティーリャ語的借用語や借用語法を嫌い、旧来の語彙や文法の維持に努める傾向にあったようである。

民主化後、カタルーニャ語が公的な場に復帰すると、「標準」とすべき文体を巡って見解の対立が生じた。正統性よりも実用性に重きを置く人々は、過度な借用語(法)忌避を止め、日常の言葉遣いを積極的に取り入れるよう主張した。こうした文体は「軽いカタルーニャ語 *català light*」と呼ばれ、むしろ正統性を重視し、Fabra 以来の文法や伝統的な語彙規範に則る「重いカタルーニャ語 *català heavy*」を好む人々からは、カタルーニャ語を「劣化 *degradar*」させるものと批判された⁴。

先に見た、現代のポップ音楽における言葉遣いへの批判は、「重いカタルーニャ語」派の見解と軌を一にするものだ。とりわけ *cumpleanys* や *tonteria*、*coti* といった語はいずれもカスティーリャ語の影響を受けた語であり、批判の対象にもなり易い。一方、The Tyets の二人はインタビューの中で、歌詞がカタルーニャ語を「劣化」させると批判する人々について尋ねられ、「*Qui no té feina, el gat pentina.*」(仕事の無い人は猫の毛をも梳く、「暇な人は無益なことをする」の意)と答えている⁵。

ところで、「*Coti x coti*」の流行が話題となった背景には、この曲のミュージック・ビデオの存在がある。特に注目されたのは、映像の最後でサルダーナ *sardana* (カタルーニャ伝統の踊り)が踊られる場面だ。もっとも、この曲のリズムはサルダーナ本来のものとは異なり、踊りのステップも伝統的形式からは外れている。それでもこの流行のおかげで、若年層のサルダーナ人口が減少しつつあると言われる中、若者が *Sala Apollo* (バルセロナ随一のダンスクラブ)で熱狂的にそのステップを踏んだり⁶、数百人の小学生がサルダー

⁴ Rico Busquets, Albert (2009). “Llibres d’estil dels mitjans de comunicació escrits en català.” Alcoba, Santiago (coord.). *Lengua, comunicació y libros de estilo*. UAB (publ. electrònica), 174-197. ISBN: 978-84-692-3369-6.

⁵ Guzman, Joan & Laura Sánchez Vila (2023, 19 mzo.). “The Tyets: ‘Jugàvem a la Segona B de la música i ara estem a Primera’.” *Nació Digital*: www.naciodigital.cat

⁶ Costa Hoyuela, Òscar (2023, 16 abr.). “La sardana també es balla a la discoteca: la cançó de The Tyets que ha unit dos mons.” *CCMA*: www.ccma.cat/324/

ナを披露するイベントが開催されたり⁷といった光景が見られ、話題となった。

The Tyets の言語観には、こうしたカタルーニャ文化に対する態度とも共通する点があるだろう。“Coti x coti”の歌詞の語彙的特徴や踊りの形式は、伝統や規範に忠実なものではない。だが、この楽曲を多くの聴衆に届けることは、言語・文化への関心を引き起こす十分な仕事 (feina) であると評価できる。The Tyets の活動は、ある言語の普及を促進すると同時に、その規範の維持には障壁となり得る二面性を帯びている。このような二面性の表れには、社会で併用される複数の言語について考える上で、重要な意義がある。カタルーニャ語による芸術活動の場は、そうした言語的葛藤の最前線であり続けてきたのだ。

【引用文献】

Pericay, Xavier & Ferran Toutain (1997). *El malentès del noucentisme: tradició i plagi a la prosa catalana moderna*. Barcelona: Proa.

田澤耕 (1992) 「カタルーニャ文学の歴史と現在」 田澤耕・編訳『バルセロナ・ストーリーズ』水声社、171-181。

(たさか・けんた 東京大学大学院博士課程)

【エッセイ 5】

Implementación de un programa de lectura extensiva en español:

Desafíos y posibilidades

Daniel ARRIETA DOMÍNGUEZ

En un reciente proyecto de investigación sobre la enseñanza de la literatura española y latinoamericana en universidades japonesas descubrimos una preocupación constante entre los profesores de dichas materias: ocho de los dieciocho profesores encuestados hicieron alusión explícita a la falta de práctica lectora (incluso en japonés) de los estudiantes de las nuevas generaciones; otros cuatro de ellos comentaron la falta de motivación frente a la literatura o a textos escritos en general. Ello me llevó a interesarme por el campo de la lectura extensiva (más conocido como *Extensive Reading* -ER- en inglés). Aprovechando que en nuestra universidad existen dos grupos de investigación sobre el tema con sendos programas de lectura extensiva en inglés y en francés, decidí aprovechar su experiencia y sus consejos, e implementar por pasos un programa similar para el departamento de español.

Según The Extensive Reading Foundation (2023), la lectura extensiva se caracteriza básicamente por: utilizar textos fáciles para los estudiantes de manera que no requieran el uso de diccionario para la comprensión de los mismos y puedan leer cuanto más mejor; son por lo general historias ficcionales (con ilustraciones añadidas en los niveles más bajos) de géneros y temas variados que motivan y permiten una alta fluidez de lectura; los estudiantes deben tener la posibilidad de

⁷ *Nació Digital* (2023, 5 my.). “Centenars de nens fan una sardana multitudinària davant la catedral de Barcelona a ritme de ‘Coti x Coti’.”

escoger entre varias opciones el libro que más les interese y que se adapte a su nivel; todos los libros deben incluir información sobre el número de palabras totales para que el estudiante rápidamente pueda conocer la extensión aproximada del mismo, y para que el profesor lleve un registro de los avances de cada estudiante; la lectura debe ser individual y silenciosa, realizándose casi siempre fuera del horario de clase; el profesor, como modelo de lectura, orienta y recomienda libros al estudiante; el objeto final de la actividad debe ser el propio placer de la lectura más que el aprendizaje de vocabulario y estructuras gramaticales, lo cual correspondería a la lectura intensiva de los textos más cortos que ya se encuentran en los libros de texto; finalmente, se recomienda la lectura de al menos un libro a la semana por estudiante, y que conlleve aproximadamente una hora de lectura.

Numerosos estudios académicos sobre los beneficios de la lectura extensiva –entre ellos, Yamashita (2008)– han mostrado que la exposición repetida del aprendiente lector a vocabulario que ya conoce favorece la consolidación del mismo en su memoria, además de que le permite descubrir más usos del mismo en contextos nuevos. De igual modo, leer una y otra vez ejemplos de patrones gramaticales ya estudiados fomenta la interiorización de dichas reglas y facilita la producción de dichos patrones. La fluidez lectora también aumenta drásticamente con la práctica extensiva de lectura, y la motivación del estudiante para enfrentarse a textos literarios recibe una influencia muy positiva. A todo ello se le debe añadir el aprendizaje implícito de los contenidos, tanto a nivel cultural como de conocimiento humano y del mundo que las historias de esos libros contienen.

Sin embargo, la cantidad y variedad de lecturas graduadas en español en comparación con el idioma inglés, es muy reducida. Ello se puede suplir con el uso de libros con ilustraciones y cómics publicados para niños nativos, aunque en este caso la selección de dichos materiales debe ser muy escrupulosa, ya que dichos niños comienzan a leer conociendo de forma pasiva cientos e incluso miles de palabras que los estudiantes de lenguas extranjeras nunca han estudiado.

Con estas premisas y haciendo uso de los materiales de lecturas graduadas en español de la biblioteca de la universidad, a mediados del semestre de primavera de 2023 comenzamos un programa piloto con estudiantes de segundo año de conversación y de tercer año de escritura. Inicialmente, el sistema obligatorio de préstamo y lectura de libros se realizaba cada tres semanas, aunque los estudiantes tenían tan solo una semana para leer cada libro en casa. Basándonos en diversas actividades presentes en uno de los libros pioneros de Bamford y Day (2004) sobre la aplicación de la lectura extensiva, tras la lectura del libro cada estudiante debía comentarlo brevemente frente a sus compañeros incluyendo elementos como: un breve resumen del mismo, qué había aprendido de esa lectura específica, mencionar qué expresión o frase del libro le había gustado más, e incluso tratar de inventar un nuevo final para la historia. Además, con el fin de disponer de datos cuantitativos sobre las preferencias de los estudiantes respecto a cada libro, la dificultad de la lectura, el tiempo total requerido para terminarla, la frecuencia de uso del diccionario durante la misma, más el nivel de inmersión en la historia leída, los estudiantes debían responder por escrito a una rápida encuesta con cinco preguntas de respuesta múltiple cerrada.

Antes del final del semestre, una vez que más materiales (cómics y libros con ilustraciones para niños) nos llegaron desde España, ampliamos el programa a otra clase de conversación de

tercero y redujimos el período de préstamo de libros a un máximo de dos semanas. También comencé a experimentar en mis clases de multimedia de primer y segundo año con *videolibros* para niños nativos disponibles gratuitamente en Internet, como actividad a realizar en los últimos minutos de cada clase. En este caso se trataba de una actividad híbrida entre lectura intensiva y extensiva, puesto que se ha de dar vocabulario antes de la actividad; y todos los estudiantes leen y ven el *videolibro* al mismo tiempo sin poder elegir aquel que se ajuste mejor a sus preferencias y a su nivel, y sin poder regular el ritmo de lectura. Tras el *videolibro* hay una sencilla prueba de comprensión de la lectura para motivarlos a prestar mayor atención. A pesar de no ser esta una actividad estrictamente de lectura extensiva, hemos considerado que puede ser una buena preparación para introducirlos en el programa de forma gradual.

Hasta el momento, la mayor dificultad en la implementación del programa ha sido la escasez de libros que se ajusten idealmente al nivel de los estudiantes, puesto que los disponibles, o son de un nivel excesivamente alto, o son demasiado extensos en términos de número de palabras. En ambos casos, los estudiantes pueden acabar desmotivados y tender a utilizar aplicaciones de traductores electrónicos para la lectura de los mismos. Sin embargo, para el semestre de otoño habremos aumentado considerablemente nuestra biblioteca de lecturas extensivas, y ordenado y etiquetado de modo eficiente todos los materiales disponibles. A pesar de no disponer todavía de datos cuantitativos o incluso cualitativos de forma consistente para un estudio de los efectos del programa, a nivel personal sí he notado a lo largo de estos tres meses un cambio en la actitud de los estudiantes hacia los textos escritos: en concreto, la posibilidad de poder hablar *a posteriori* con sus compañeros de forma creativa sobre sus lecturas les hace referirse a ellas con pasión, prueba de que, como mínimo, se está produciendo un cambio motivacional.

Este proyecto se encuentra todavía en sus fases iniciales y tiene mucho camino por delante, pero sus posibilidades resultan muy prometedoras, e invitamos a otras universidades en Japón a que implementen programas de lectura extensiva similares.

REFERENCIAS BIBLIOGRÁFICAS

Bamford, J., Day R.R. (2004). *Extensive Reading Activities for Teaching Language*. New York, Cambridge University Press

The Extensive Reading Foundation (2023). *Guide to Extensive Reading En Español*. Recuperado de https://erfoundation.org/guide/ERF_Guide-Sp.pdf

Yamashita, J. (2008). Extensive reading and development of different aspects of L2 proficiency. *System* 36, 661-672

(ダニエル・アリエタ＝ドミンゲス 京都外国語大学准教授)

【エッセイ 6】

国書刊行会創業 50 周年に寄せて

竹村 文彦

海外文学や幻想文学の分野で異彩を放つ出版社・国書刊行会（以下「国書」と記す）が、創業 50 周年を迎えた（正確には今年で創業 52 年）。昨年秋より、全国各地の大型書店で記念フェアが開催されており、非売品の記念小冊子『国書刊行会 50 年の歩み』と『私が選ぶ国書刊行会の 3 冊』も同時に刊行された。国書といえば、早くからスペインとラテンアメリカの文学紹介に取り組んできた出版社でもあり、私など同社の本にどれだけお世話になったか分からない。

上記の小冊子『50 年の歩み』は、国書の編集長を 20 年間も務めた磯崎純一さんへのインタビューや、「国書らしさ」をめぐって 9 人の社員が語り合った座談会などを収録し、国書ファンはもちろん、本好きの人なら誰でも楽しめる（ちなみに磯崎さんは、編集者として交流のあった作家・澁澤龍彦の伝記『龍彦親王航海記』を著し、2019 年度の読売文学賞を受賞されている）。これらの記事を読むと、佐藤今朝夫社長の豪放にして愉快なお人柄が浮かび上がる。編集部は今野道隆さんの談によると、採用前の面接で社に出向いたところ、用務員のおじさんが部屋まで案内してくれた。そのおじさんが、そのままソファに座って「佐藤です」と名乗るではないか。面接では、「社長が三十分くらいずっと喋り続けて、口を挟ませてくれない（笑）。よくわからないままに採用され」という。磯崎さんが若い頃、「社内では毎晩のように社長を中心に大酒盛りをやってどんちゃん騒ぎをしていた」。無理やり誘われるので、「そんな社長に捕まらないようにして命ながら無事帰るのが至難の業でした」。磯崎さんが社長から、「明日から編集長をやれ」といきなり宣告されたのも、そんな飲み会のただ中のことだった。全 45 巻からなるシリーズ《世界幻想文学大系》（1975～1986 年）は、元はといえば評論家・作家の紀田順一郎と荒俣宏が持ち込んだ企画であった。すでに 20 社くらいから断られていたため、両氏は駄目で元々という心境で面談に臨んだというが、達磨ストーブに当たっていた社長はこちらを振り向き、「いつからやれますか」と即答したという。その頃まで復刻版や仏教関連の本を手がけていた国書は、この即断をきっかけに路線を拡大し、海外文学の領域に乗り出すことになる。

このような社長の率いる会社が型破りでないはずはない。普通の出版社とは異なり、国書には伝統的に企画会議というものがなく、企画の採否は社長ないし編集長の独断で決められてきた。その代わり一旦企画が通れば、収録内容から装幀にいたるまですべて担当編集者の裁量に委ねられ、「結果、それぞれの編集者の趣味や志向を強く反映した冒険的な企画が次々に生まれ」る。「個人の熱意を尊重する姿勢」、「やりたいならやってみろ」というスタンス、そしてそうしたスタンスが促す「自分の企画に対する責任や覚悟」——こうしたものが、どうやら個性の際立った本作り（すなわち「国書らしさ」）を支えているようだ。

坂田幸子さんがマドリードの前衛文学運動を論じた『ウルトライスマ』(2010 年)、且敬介さんが長い歳月をかけて訳し上げたレサマ＝リマの『パラディーソ』(2022 年)をはじめ、国書の書籍で取り上げたいものは山ほどあるが、ここではスペインないしラテンアメリカの文学に的を絞ったシリーズもの（叢書）に言及するに留めよう。1960 年代に興

ったラテンアメリカ小説の世界的〈ブーム〉に呼応して編まれたのが、《ラテンアメリカ文学叢書》(全15巻、1977～1980年)で、〈ブーム〉の四大巨匠はもとより、カブレラ＝インファンテ、アストゥリアス、サバト、サルドウイ、プイグといった多彩な作家が一堂に会している。集英社の同種の企画《ラテンアメリカの文学》(全18巻)の刊行が、1983年から1984年にかけてであることを考えれば、国書の先見性がよく分かる。《スペイン中世・黄金世紀文学選集》(全7巻、1993～1997年)は、『わがシッドの歌』から『ラ・セレスティーナ』を経て、『バロック演劇名作集』までを収める。スペイン文学の真の土台と呼ぶべき古典が、こうした形でまとめて提示された意義は大きい。『論議』、『序文つき序文集』などが含まれる《ボルヘス・コレクション》(全7巻)は、アルゼンチンの鬼才のエッセイストとしての側面に焦点を当てる。2000年に刊行が始まったシリーズがいまだに「刊行中」なのは、もっぱら私(竹村)の責任で、恥ずかしい。最近出版された《新しいマヤの文学》(全3巻、吉田栄人訳、2020年)は、注目度が高いようだ。『私が選ぶ国書刊行会の3冊』でも、53人中4人がこのシリーズの作品を選んでいる。その中から、詩人の小池昌代のコメントを引いておく——『夜の舞・解毒草』には共感覚を呼び起こされる。ユカタン・マヤ語で書かれた魔法の世界。人間の作った世界よりも自然界のほうが圧倒的に大きい。わたしたちの見る夢は、そこに生まれそこから流れてくるのだろう。

本学会の会員が研究対象とする地域の文学紹介に、国書刊行会が今後ますます力を入れてくれるよう切に願う。そのためには、文学研究者の方も絶えずアンテナを張り巡らし、最新の作であれ、何世紀も昔の作であれ、翻訳に値する魅力的な作品を見つけ出すように努めなければならない。

(たけむら・ふみひこ 東京大学教授)

【著書紹介】

浅香幸枝(編)

『2030 アジェンダ(SDGs) 実現に向けて—世界の先駆的実例から学ぶ—』
南山大学地域研究センター共同研究シリーズ15(三修社、2023)

浅香 幸枝

本書は、2021年・2022年度 南山大学地域研究センター共同研究「2030 アジェンダ(SDGs) 実現に向けて：世界の先駆的実例から学ぶ」で実施された研究成果物である。

スペイン語圏だけでなく、旧スペイン領であったフィリピンや、ラテンアメリカの大国ブラジルそして同じくポルトガル語圏であるモザンビークや日本の事例を扱っている。2年間の共同研究で判明したことは、2015年に国連総会において全会一致で採択された「2030 アジェンダ(Sustainable Development Goals: SDGs)」の発案国がスペイン語圏のコロンビアであったことであり、日本は本政策に対して大変熱心な先導国であり、SDGsの17の行動目標に向けて国際協力体制を築く主要なアクターであるということだ。

本研究の代表者は、1987年以来南北アメリカで開催されるパンアメリカン日系大会の事例を研究してきた。日本をルーツに持つ「Nikkei」と自己認識する日系人はそれぞれ多

様であるが、この大会に参加する日系人は、生まれた国と先祖の国である日本の両方のルーツを大切にしており、人類と言ってよいような「Nikkei」意識を持ち行動している。そのため、筆者はこの先駆的な意識を維持発展させるために最適な共同目標が、この地球規模の課題解決である 2030 アジェンダではないかと考えたのが、共同研究を組織した理由である¹

本共同研究は、2023 アジェンダ (SDGs) 実現に向けた先駆的実例から学び、帰納的な方法によって、その手法や法則性を分析・抽出する。研究者・政策立案実施者・学校設立実施者という三位一体の執筆陣により、理論と現実を踏まえた実際的な事例を取り上げている。具体的な手法や技術を紹介し、多文化共生がより実現しやすくなることをめざした。人の移動を通じて、またスペイン語などの言語を通じて世界は繋がっている。また、政策においても国境を越えて最適な手法を互いに学び合うという内発的発展の様子を知ることができる。世界は G7 に代表される先進国とグローバル・サウスと呼ばれる新興国に分断されるのではなく、人類として共に地球環境を守り、社会、経済発展を目指すという共通の目標に向かって何が本当に大切なのかゆったり考えることが必要なように思う。私たちの研究成果が役に立つことを期待している。

目次は以下の通りである。

序章 2030 アジェンダ (SDGs) 実現に向けて

—世界の先駆的実例から学ぶ— (浅香 幸枝)

第 1 章 2030 アジェンダとカーボンニュートラル社会への取組

—持続可能な地域づくりと港湾政策— (須野原 豊)

第 2 章 海洋プラスチックごみと日本の国際協力の対応 (デヴィッド・M・ポッター)

第 3 章 2030 アジェンダ実現に向けての法律の役割

—ブラジルの事例を手がかりとして— (二宮 正人)

第 4 章 コロナ禍でのラテンアメリカの SDGs と日本の関わり (堀坂 浩太郎)

第 5 章 ラテンアメリカ諸国と日本の経済連携協定 (EPA)

—メルコスールとの EPA への展望— (渡邊 頼純)

第 6 章 SDGs 実現のための日本のパートナーとしての南北アメリカ日系社会 (浅香 幸枝)

第 7 章 2030 アジェンダへのモザンビークの取組とブラジル及び日本の協力 (木村 元)

第 8 章 2030 アジェンダと大麻合法化問題 —日本での議論を中心に— (二村 久則)

第 9 章 SDGs 実現のためのネットワーク形成

—学生団体 CLOVER の設立と活動を通じて— (本田 光)

第 10 章 フィリピンでの私の経験 (ジョン・シーランド)

第 11 章 フィリピン日系人のレガシー

—未来への希望の架け橋となる教育— (イネス・山之内・マリヤリ)

¹ 浅香幸枝 「『地球儀を俯瞰する外交政策』と中南米日系社会との連携に関する一考察—パンアメリカン日系大会の視座から—」日本国際政治学会編『国際政治：ラテンアメリカ—内政と国際関係の再検証—』第 207 号、2022 年 3 月。

第12章 ドミニカ共和国と日本—過去・現在・未来— (高田 ロバート)

終章 人類の共通益を目指して (浅香 幸枝)

(あさか・さちえ 南山大学非常勤講師)

【学会等報告1】

京都セルバンテス懇話会主催第23回全国・奈良大会
(2022年9月17日 於奈良県コンベンションセンター)

三浦 知佐子

2022年9月17日に京都セルバンテス懇話会主催第23回全国・奈良大会が奈良市にあるコンベンションセンターで開催された。

今回の全国大会では5点の研究報告および特別講演と自著紹介が行われた。以下にプログラムを紹介したい。

研究報告1「大衆の反逆と限界芸術—大衆社会における美と芸術を巡るオルテガと鶴見俊輔」豊平太郎 (京都外国語大学・立命館大学兼任講師)

研究報告2「スペイン語を取り入れた漫オワークショップ—コロナ禍におけるオンライン学修の試み—」橋本和美 (天理大学准教授)

研究報告3「江戸末期日本人の「スペイン語リスニング力」—栄寿丸乗員・初太郎の事例 (1841-43)」椎名浩 (熊本学園大学兼任講師)

特別講演《奈良—トレド姉妹都市交流50周年に寄せて》高洋平 (奈良市観光戦略課総務交流係長)、フアン・ロペス (天理大学准教授)

研究報告4『『ドン・キホーテ』とトレド』三浦知佐子 (天理大学・京都外国語大学兼任講師)

自著紹介「ロサリア・デ・カストロ著『新葉 (*Follas Novas, Hojas Nuevas*, 1880)』(思潮社2022年8月発行)について」桑原真夫 (ガリシア文学者)

研究報告5「アラビア語起源のスペイン語彙に関するいくつかの考察」水戸博之 (文化史家)

京都セルバンテス懇話会は、スペインの総合的研究・スペイン学、同語圏への文化理解等の進展を期して1997年に京都外国語大学坂東省次教授を代表に設立された学術組織であり、この第23回大会(2022)は、片倉充造(京都セルバンテス懇話会代表・天理大学教授)の開会挨拶で始まり、野呂正(中央大学名誉教授)の閉会の辞をもって閉会した。本大会については京都セルバンテス懇話会編『スペイン学』第25号(論創社、2023年3月発行)に掲載されている。

2023年9月16日には第24回全国・名古屋大会が南山大学で開催される。同大会については次回の会報で報告したい。

(みうら・ちさこ 京都セルバンテス懇話会庶務)

【学会等報告 2】

「関西スペイン語学研究会」とその（直近の）活動について

土屋 亮

「いや、なんでお前が書くねん？関西を離れてもう 12 年やないか」と言われそうである。本稿では代打として打席に立っておりまして、関西の先生方、どうぞお許してください。

スペイン語を対象とする言語学（以下、スペイン語学と言う）を専門とする研究者は日本各地にいるが、関東、中部、関西地方に特に集中している。そして、関東には「東京スペイン語学研究会」が、関西には「関西スペイン語学研究会」が存在し、多くの研究者および大学院生が所属し、研究発表を行っている。かつては中部地方にも「中部スペイン語学研究会」なるものがあつたらしく、『ロマンス語研究』Vol.13/14 所収の原(1981)にも言及が見られるが、筆者はその活動について見聞したことはなく、原も「よく知らない」と書いている。なお、筆者は関西スペイン語学研究会と東京スペイン語学研究会双方の、年会費をきちんと払う会員である。滞納などしたことはない（本当か）。

「関西スペイン語学研究会」（発足当初は「～談話会」）は「東京～」よりも 1 年早く 1974 年に発足し、第 1 回（同年 8 月 18 日）の発表者は現神戸市外国語大学名誉教授の宮本正美先生で、題目は「スペイン語における代名詞の余剰構文」であったという。筆者が生まれる前の話だ。爾来、ほぼ欠かすことなく毎月会員の誰かがスペイン語学についての発表を行うようになり、さらに 1978 年には *Lingüística Hispánica* という機関誌ができ、会員がスペイン語ないし英語で論文を書き投稿している。会員の多くは、大阪外国語大学（現大阪大学外国語学部）、神戸市外国語大学、関西外国語大学等の出身者ないし在職者で、研究会創設に関わった先生方、*Lingüística Hispánica* 第 1 号に論文を投稿されている世代の先生方は、現在ではすでに御退職を迎えられ、中には鬼籍に入られてしまった先生もいる。

筆者は大学院に入学した 2001 年の 5 月から関西スペイン語学研究会に参加するようになり、博士課程に進学した 2003 年から 8 年ほど、会の連絡役と会計を務めた。2011 年以降は関西を離れたため参加する機会が減っていたが、ここ 3 年ほどはコロナ禍で Zoom を用いたオンライン開催となり、東京にいながら関西の例会にも参加できるようになった。関西の例会には、会場が固定されておらず、京都、大阪、神戸の各所で開催する（東京は東京外国語大学で毎月ほぼ固定）、発表を取り仕切る司会をもうけないなど、東京といくつか異なる特徴がある。司会がないため、質疑応答の際、発表者自らが「そろそろこれで・・・」と終わりに持ち込む戦法もある（ない）。

東京と異なる点と言えば、関西では、毎年発行する上述の機関誌のほかに、これの Anexo として、RAE の *Gramática descriptiva de la lengua española*（原著 1999 年刊行）、*Nueva gramática de la lengua española*（原著 2009 年刊行）とその *Fonética y fonología*（原著 2011 年刊行）のいくつかの章を日本語で要約したものを過去に 6 冊、不定期で刊行している。これらのほか、直近では、故高橋覚二先生が生前インターネット上のページで公開されていた『スペイン語文法用語集』が、先生の御退職後から閲覧できなくなっているのを惜しむ声が会員の中から上がり、これを御遺族の許可を得て、研究会の有志で編集および一部補筆したものをまとめ、今年の 3 月に出したところである。これは、パソコン・インターネットの普及間もない頃から『用語集』を公開されていた高橋先生の業績を形に残す事業

となった。

コロナ禍では、関西スペイン語学研究会も当然のことながら、他の研究会や学会同様、Zoom を用いたオンライン開催を余儀なくされた。コロナ後、初めて対面（ハイフレックス）での開催となったのは、通常の例会ではなく、昨年 8 月 23 日から 25 日にかけて開催された SELE 2022 である。SELE というのは、関西スペイン語学研究会と東京スペイン語学研究会が毎年夏ごろに合宿をして研究発表をする集まりで、SELEK（K は Kansai の K）と呼ばれていた頃も含め、40 年以上の歴史がある。発表は学会に近い形式で行われるが、懇親会などで年齢や立場に関係なく自由に議論ができる貴重な場である（本稿執筆後、8 月 23 日から 25 日にかけて SELE2023 が掛川市で開催された）。その後、今年に入り、2 月 16 日に立命館大学において「日本語とスペイン語の対照文法公開シンポジウム」がハイフレックスで開催され、研究会はこのシンポジウムに「協力」ということで関わっている。このシンポジウムには、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学の Tomás Jiménez Juliá 氏が招かれたほか、立命館大学からは仲井邦佳先生と有田節子先生が、研究会からは大学院生の手塚進氏、福寫教隆先生、川口正通先生が講演ないし発表をされた。そして、翌 3 月の 25 日キャンパスプラザ京都にて、通常の例会が初めてハイフレックスで開催され、傘寿を迎えられた三好準之助先生と筆者が発表を行った。三好先生の発表題目は「スペイン語の思弁的現在について」というもので、先生が「発表はこれで最後」と事前に言われていたこともあり、オンラインの参加者に加え、東京や福岡からも会員が京都に集まり、盛会となった。

ここ 20 年ほどの大学を取り巻く環境の劣悪化のため、どの研究分野であれ、後進が入ってこない、育たないという現象が続いている。しかし、関西の研究会では、スペイン語学を志す大阪大学や神戸市外国語大学の院生がここ 1、2 年新たな会員として入ってきて、研究発表を行っており、心強い。関西・東京の両研究会に所属している者として、双方の研究会が今後も引き続き切磋琢磨できれば良いと思う（まずお前が頑張れよ。はい）

（つちや・りょう 亜細亜大学准教授）

【新刊案内】

2022年6月から2023年5月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。遺漏があるかもしれません。ご教示願います。

- 『街と犬たち』, マリオ・バルガス＝ジョサ, 寺尾隆吉 (訳), 光文社古典新訳文庫, 2022年6月
- 『新・スペイン人が日本人によく聞く100の質問 スペイン語で日本について話すための本』, 瓜谷望・瓜谷アウロラ, 三修社, 2022年6月
- 『カタルーニャ語 小さなことば 僕の人生』, 田澤耕, 左右社, 2022年6月
- 『アルハンブラ物語』, W・アーヴィング, 齋藤昇 (訳), 光文社古典新訳文庫, 2022年7月
- 『僕たちのバルセロナ』, 田澤耕, 西田書店, 2022年7月
- 『帝国スペイン 交通する美術』, 岡田裕成 (編), 三元社, 2022年7月
- 『独裁者を倒せ スペイン民主化の奇跡』, 江口義孝, 三冬社, 2022年7月
- 『ガルシア＝マルケス中短編傑作選』, ガブリエル・ガルシア＝マルケス, 野谷文明 (訳), 河出書房新社, 2022年7月
- 『ウルグアイを知るための60章』, 山口恵美子 (編), 明石書店, 2022年7月
- 『現代ホンジュラスを知るための55章』, 中原篤史 (編), 明石書店, 2022年7月
- 『精霊たちの迷宮 上・下』, カルロス・ルイス＝サフォン, 木村裕美 (訳), 集英社文庫, 2022年8月
- 『アストゥリアス讃歌』, 藍川夏美, パプフル, 2022年8月
- 『カリブ海の黒い神々 キューバ文化論序説』, 越川芳明, 作品社, 2022年8月
- 『リャマサーレス短編集』, フリオ・リャマサーレス, 木村榮一 (訳), 河出書房新社, 2022年9月
- 『エバ・ルーナ』, イサベル・アジェンデ, 木村榮一 (訳), 白水Uブックス, 2022年9月
- 『アラゴン連合王国の歴史 中世後期ヨーロッパの一政治モデル』, フロセル・サバテ, 阿部俊大 (訳), 明石書店, 2022年9月
- 『時の中の自分 サグラダ・ファミリア「石のマエストロ」 魂をはぐくむメッセージ』, 外尾悦郎, 天理教道友社, 2022年9月
- 『サラゴサ手稿 上・中・下』, ヤン・ポトツキ, 畑浩一郎 (訳), 岩波書店, 2022年9月-2023年1月
- 『マジカル・ラテンアメリカ・ツアー 妖精とワニと、移民にギャング』, 嘉山正太, 集英社インターナショナル, 2022年9月
- 『パラディーソ』, ホセ・レサマ＝リマ, 旦敬介 (訳), 国書刊行会, 2022年10月
- 『兎の島』, エルビラ・ナバロ, 宮崎真紀 (訳), 国書刊行会, 2022年10月
- 『北米移民メキシコ人のコミュニティ形成』, 吉野孝・山崎眞次, 東信堂, 2022年10月
- 『エバ・ルーナのお話』, イサベル・アジェンデ, 木村榮一 (訳), 白水Uブックス, 2022年10月
- 『死が三人を分かつまで』, ケイティ・グティエレス, 池田真紀子 (訳), U-NEXT, 2022

年 10 月

- 『超初級から話せるスペイン語声出しレッスン』, 元井美貴, アルク, 2022 年 11 月
- 『新葉』, ロサリア・デ・カストロ, 桑原真夫 (訳), 思潮社, 2022 年 11 月
- 『ルイス・ブニュエル 増補改訂版』, 四方田犬彦, 作品社, 2022 年 11 月
- 『図説ポルトガルの歴史 増補改訂版』, 金七紀男, 河出書房新社, 2022 年 11 月
- 『マヤ文明の戦争 神聖な争いから大虐殺へ』, 青山和夫, 京都大学学術出版会, 2022 年 11 月
- 『地図でスッと頭に入る中南米&北アメリカ 36 の国と地域』, 井田仁康 (監修), 昭文社, 2022 年 11 月
- 『「よりどころ」の形成史 アルゼンチンの沖縄移民社会と在亜沖縄県人連合会の設立』, 月野楓子, 春風社, 2022 年 11 月
- 『ブラジルからオハヨウ!』, いまいはるみ, 東京図書出版, 2022 年 11 月
- 『スペイン語で綴る土佐日記』, 伊藤昌輝 (訳), エレナ・ガジェゴ=アンドラダ (訳), 大盛堂書房, 2022 年 12 月
- 『アンダルシア夢うつつ 南につくと、そこにはフラメンコがあった』, 野村真里子, 白水社, 2022 年 12 月
- 『池上彰の世界の見方 中南米 アメリカの裏庭と呼ばれる国々』, 池上彰, 小学館, 2022 年 12 月
- 『わたしのアグアをさがして』, 深沢潮, KADOKAWA, 2022 年 12 月
- 『花びらとその他の不穏な物語』, グアダルーペ・ネッテル, 宇野和美 (訳), 現代書館, 2022 年 12 月
- 『中南米グルメ紀行』, さかぐちとおる, 東京堂出版, 2022 年 12 月
- 『キューバ ハバナ下町歩きとコロナ禍の日々』, 板垣真理子, 彩流社, 2022 年 12 月
- 『ブラジルの社会思想』, 小池洋一・子安昭子・田村梨花 (編), 現代企画室, 2022 年 12 月
- 『ブラジリアン・ミュージック』, 中原仁, アルテスパブリッシング, 2022 年 12 月
- 『富之助とみよ あるブラジル日系人牧師の心の日本』, 石井浩, 柏艚舎, 2022 年 12 月
- 『アマゾンに鉄道を作る 大成建設秘録 電気がないから幸せだった。』, 風樹茂, 杉原修 (編), 五月書房新社, 2023 年 1 月
- 『ブラジル 経済・貿易・産業報告書 (2023/2024 年版)』, ARC 国別情勢研究会, 2023 年 1 月
- 『多文化都市ニューヨークを生きる』, 神館美会子・リョウ和田, 花伝社, 2023 年 1 月
- 『ハプスブルク事典』, 川成洋・菊池良生・佐竹譲一 (編), 丸善出版, 2023 年 2 月
- 『新版 スペイン語作文の方法 構文編』, 小池和良, 三修社, 2023 年 2 月
- 『新版 スペイン語作文の方法 表現編』, 小池和良, 三修社, 2023 年 2 月
- 『無垢なる聖人』, ミゲル・デリーベス, 喜多延鷹 (訳), 彩流社, 2023 年 2 月
- 『ガウディの遺言』, 下村敦史, PHP 研究所, 2023 年 2 月
- 『文学とラテンアメリカの風土 交錯する人と社会』, 高林則明, 行路社, 2023 年 2 月
- 『夜明け前のセレスティーノ』, レイナルド・アレナス, 安藤哲行 (訳), 国書刊行会, 2023 年 2 月

- 『マーメイド・オブ・ブラックコンチ』, モニーク・ロフェイ, 岩瀬徳子 (訳), 左右社, 2023年2月
- 『スペインと中南米の絆 意識しないほどの深いつながり』, 渡部和男, 彩流社, 2023年2月
- 『タンゴ タンゴ タンゴ 情感 Sentimiento 織りなす魂のしらべ』, 大類善啓, 批評社, 2023年2月
- 『フィリピンの歴史 フィリピン小学校歴史教科書 5・6年生』, アイリーン・C・デ・ロブレス (編), 明石書店, 2023年2月
- 『スペイン語文法用語集』, 高橋覚二, 関西スペイン語学研究会, 2023年3月
- 『日本文化の通になる スペイン語を話す人々のための日本事典 II』, 遠西啓太, 朝日出版社, 2023年3月
- 『タキ・オンコイ 踊る病 植民地ペルーにおけるシャーマニズム, 鉱山労働, 水銀汚染』, 谷口智子 (編), 春風社, 2023年3月
- 『2030 アジェンダ (SDGs) 実現に向けて 世界の先駆的実例から学ぶ』, 浅香幸枝 (編), 南山大学地域研究センター共同研究シリーズ 15, 三修社, 2023年3月
- 『スペイン学』, 第25号, 京都セルバンテス懇話会 (編), 論創社, 2023年3月
- 『世界の中のラテンアメリカ政治』, 舛方周一郎・宮地隆廣, 東京外国語大学出版会, 2023年3月
- 『ヴィラ＝ロボス ブラジルの大地に歌わせるために』, 木許裕介, 春秋社, 2023年3月
- 『文明交錯』, ローラン・ピネ, 橋明美 (訳), 東京創元社, 2023年3月
- 『ラーラ 愛と死の狭間に』, マリアーノ・ホセ・デ・ラーラ, 安倍三崎 (訳), 法政大学出版局, 2023年4月
- 『スタジアムの神と悪魔 サッカー外伝 改訂増補版』, エドゥアルド・ガレアーノ, 飯島みどり (訳), 木星社, 2023年4月
- 『ブラジル文学傑作短編集』, 岐部雅之 (編), 水声社, 2023年4月
- 『のぞいてみよう外国の小学校3 アメリカ, キューバ, ブラジルほか』, ERIKO, 汐文社, 2023年4月
- 『米墨戦争とメキシコの開戦決定過程 アメリカ膨張主義とメキシコ軍閥間戦争』, 牛島万, 彩流社, 2022年4月
- 『南北アメリカ研究の課題と展望 米国の普遍的価値観とマイノリティをめぐる論点』, 住田育法・牛島万 (編), 明石書店, 2023年4月
- 『チリ 経済・貿易・産業報告書 (2023/2024年版)』, ARC 国別情勢研究会, 2023年4月
- 『ホセ・ムヒカ 自由への挑戦』, マウリシオ・ラブフェッティ, 鱈沼悟 (監修), プレジデント社, 2023年4月
- 『世界の食卓から社会が見える』, 岡根谷実里, 大和書房, 2023年4月
- 『先住民から見た世界史 コロンブスの「新大陸発見」』, 山本紀夫, 角川ソフィア文庫, 2023年5月
- 『寝煙草の危険』, マリアーナ・エンリケス, 宮崎真紀 (訳), 国書刊行会, 2023年5月

- 『フリーダ・カーロの日記』, フリーダ・カーロ, 星野由美・細野豊 (訳), 富山房インターナショナル, 2023年5月
- 『ポルトガル 経済・貿易・産業報告書 (2023/2024年版)』, ARC 国別情勢研究会, 2023年5月
- 『よかったさがし フラメンコと歩んだ人生』, 鈴木真澄, メディカルサイエンス社, 2023年5月

【HISPÁNICA 編集委員会より】

HISPÁNICA 第 68 号の原稿を募集しています。なお、今回から電子投稿になります。下記の投稿サイトからご投稿ください。詳細については、学会ホームページの機関誌投稿規程をご参照ください。

https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSfW60MMODzI9-nLxVw_SwKd1643YxSYi2jiKLf7Kwc18lCvSQ/viewform?usp=sf_link

【編集後記】

会報30号をお届けします。巻頭言をお寄せいただいた杉山先生はじめ、ご寄稿いただいた方々には心よりお礼申し上げます。

編集にあたっては、スペイン語圏の多様性を念頭にいくつかテーマを設定し、日本語の原稿ばかりにならないよう配慮しながら、会員間の情報共有や意見交換のきっかけとなるよう努めました。

ChatGTPについては今も続々と解説書や特集記事が出ていますが、会員の多くが何らかの形でスペイン語教育に携わっている本学会にとって、教育とテクノロジーの関係は今後も大きな関心事のひとつであり続けるように思います。また、昨年9月、カタルーニャ研究の第一人者・田澤耕氏がお亡くなりになりましたが、その業績の恩恵に浴する会員は少なくありません。追悼の意も込めて、カタルーニャを専門とする会員に寄稿をお願いしました。新刊案内にはポルトガルやブラジル、フィリピン等に関する書籍も含めましたが、確認するたびに遺漏が見つかる一方で、どこまで網羅すべきなのか、今でも悩ましいです。

他方、今号では書評や国際学会の報告を掲載できませんでした。各地で行われている大小の研究会の活動報告や、映画評・劇評・展評など、もっと掲載すべきだったかもしれません。編集担当として反省するとともに、会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようお願い申し上げます。

(広報委員長 中井博康)